

1歳10ヶ月から2歳半に至る自己の発達

— 母子相互作用場面での共有テーマの特徴と「述べる」行動に着目して —

瀬野 由衣*

問題

本稿は、一組の母子の自由あそび場面の縦断的観察を通して、1歳10ヶ月から2歳半に至る自己の発達について考察することを目的とする。ここで参照する主な枠組みは、「述べる」行動（久保田, 1993）と木下（2008）の自他理解に関する発達モデルである。

久保田（1993）は、三項関係の成立場面を例にあげながら、自分が見たことを他者が存在する公的な場で言うことを「述べる」と定義し、その起源が9～10カ月頃の指さしにあること、「述べる」行動には、何かを他ならぬそれと認める「対象化」と自分以外の他者との「並ぶ関係」の中で成立するという重要な側面が含まれると指摘している（詳細は、瀬野, 2012参照）。「述べる」行動はその起源が指さしにあるとはいえ、簡単にいえば発話である。久保田（1993）がこれをあえて「述べる」行動としたのは、子どもの言葉を表面的に捉えるのではなく、発話を（他者とともに存在している状況での）主体の出来事や事象への態度表明として捉えようとしたからであると思われる。子どもは、指さしを通してこの世界を「切り取って固定する」（三木, 1982）ことが可能になり、そこで、初めて、「あった」という出来事の区切りをいられるようになる。その後、子どもは「述べる」行動を通して世界を分節化していく。久保田（1993）は、1歳前後から3歳頃までの数人の子どもの発話を「述べる」行動として整理し、2歳半（もしくは3歳頃）の子どもは、基本的な論理、過去、現在、未来の中に自分の経験を位置づけ、わたしとあなたの理解とを合わせて、それまでのあらゆる行動を自分の行動として述べることができ始めると指

摘する。2歳半頃の幼児に、この世界について語ることが出来始める一人の人格の誕生をみようとしているといえよう。

しかしながら、その整理は未だ羅列的な面が多く、2歳半の到達点が十分に整理されているとはいいがたい。そこでまず参照したいのが、木下（2008）の自他理解に関する発達モデルである。

木下（2008）は、ワロン（1965, 1983）や谷村（1989, 1994）の示唆を取り入れ、“自己と他者という関係構造そのものが発達的に変化し、形成されていく”ことを主眼においた幼児期全体を視野に入れた発達モデルを構築している（詳細は、瀬野, 2012参照）。とりわけ、2歳代前半には、表象レベルでの自他の分化が生じ、目の前で直接観察できない状況でも、「相手の意図を事前に予期した」対人行動がとれるようになると指摘している。例えば、「チョコ、ホシイナア」という形で相手の意向を何うような要求表現をしたり、他者の視線の先にあるおもちゃの存在に気づいて「シンカンセン、ホシイ？」と尋ねるといった例が該当する。さらに、この時期には、Wallon（1983）がいう「一人二役会話」が開始され、自分の中に「内なる他者」（自己に対して、ある時には気づかない、ある時は叱咤するといった形で固有の意図、視点、思惑をもって自己に関わってくる主体）が分化されてくると指摘している（木下, 2008）。こうした「内なる他者」が分化してくる2歳台前半には、この時期に固有の特徴がある。自他の視点を対比し始めているものの、その違いに気づいて、自分の立ち位置（視点）を明確にすることが困難であるという点である。このことがより鮮明になるのが、自他の「見え」の違いが顕在化する状

況である。木下（2002, 2008）は、視点相違によるミスコミュニケーション場面を実験的に設定し、2歳後半頃から、同じ対象を見ているようでも他者が見ている対象が自分の見ている対象と異なることを理解し、ミスコミュニケーション場面を修復するようになることを示した。こうした視点相違の問題は、言語レベルでも生じる。例えば、「行ってらっしゃい」―「行ってきます」というやりとりを臨機応変に行うには、自分が去る側に立つのか、送り出す側に立つのかという立ち位置（視点）を理解する必要がある。これが困難な2歳前半では、能動と受動の混乱（「行ってらっしゃい」―「行ってきます」を使用する時の視点の誤り）と呼ばれる現象が生じやすいことが指摘されている（木下, 2008）。こうした視点の相違を理解し、揺るぎない自分の視点に立てるようになるのが2歳半～3歳前後である¹⁾。木下（2008）はこの時期の自己理解を「思考や言語の自律した主体として表象される自己」としてモデル化している。

以上から、2歳半～3歳前後の到達点として、「自他の視点を対比し、自分の視点に立てるようになること」が重要であると推察される。

これに加えて、本研究で焦点を当てるのは、2歳前後から本格的に開始される対比的認識の発達である。これは、「オンナジ」「オオキイ」「チイサイ」といった事物の大小関係等に関する概念に関わる認識（神田, 2004；寺川, 2009；久保田, 1993）を指している。上で述べた対比が自他視点に関わる対比であるのにたいし、ここでの対比的認識は概念的認識に関わる対比といえる。ここに注目することで、物事を見て判断する主体として2歳台にどのような発達が遂げられるのかをみることができると考えられる。

さらに、本研究では、子どもの「述べる」行動の中でも時間軸の形成に関する発話にも着目する。既に述べたように、子どもはまず、他者と共にいる状況で指さしを通して「あった」という形で出来事を分節化するようになる。これは、現在進行形で流れている時間に完了という形で、主体が区切りをいれるものである。1歳頃より子どもは言語によって出来事や事象に区切りを入れるようになるが、その後、子どもは遭遇する出来事に対してどのように時間的区切りをいれていくのだろうか。久保田（1993）は、現在や過去をその時点のこととしてはっきりと認識して「述べられる」ようになるのが2歳半頃と報告している。こうした時間軸の形成がいかに進んでいくのかについても、

検討することとする。

以上、みてきたように、本研究では、「述べる」行動の変化を主に、時間軸の形成、二種類の対比的認識（自他視点の対比および概念的認識の対比）に着目して検討していくが、本研究の特徴は、これらをあそび場面で検討する点にある。あそび場面では、必ず、何らかの形であそびのテーマが共有される。瀬野（2010）では、こうしたあそびのテーマを共有テーマと呼び、2～3歳児のあそび場面で成立する共有テーマの特徴を検討してきた。共有テーマとは、自己と他者の間で、あそびの共通のテーマが立ちあがることであり（瀬野, 2010）、より簡潔に言えば、自他がどのように共同的なやりとり（「イッショに」）を成立させているのか、その特徴をみようというものである。あそびの共有テーマやそこで生じる自他間のやりとりには、その時期の発達の特徴が自ずと現れると考えられる。母子自由あそび場面で共有されるテーマの特徴と児の「述べる」行動（時間軸の形成および二種類の対比的認識の発達）の特徴を関連づけることで、あそびの共有の背後にある児の認識の特徴について考察することが可能になると思われる。

ここまでの議論をまとめて、最後に、本研究の目的を整理する。幼児期の発達はその後も重要な転換点があるが、本論文では、主に二つの研究（久保田, 1993；木下, 2008）を参照し、2歳半前後に、時間軸の形成、概念的認識に関わる対比、そして自他視点の理解という点で重要な変化があると想定し、その変化を1歳10ヶ月から2歳半にかけて、母子の自由あそび場面の観察によって検討する。本研究の特徴は、あそび場面で共有されるテーマの特徴と児の「述べる行動」を関連づけて考察することである。

また、テーマの共有に至る過程で母親がとる行動も併せて検討することで、児の内面世界の形成に与える母親の行動や言葉かけの役割についても考察する。一児の事例に過ぎないという限界はあるものの、先行研究で指摘されている諸事実を確認しつつ、1歳後半から2歳半に至る自己の発達の様相をあそび場面を切り口としながら、考察していきたい。

方法

筆者の大学時代の友人の第二子（200X年8月生まれ）、男児であった（第一子、第三子共に男児）。周産期も異常はなく、発育、発達ともに順調であった。言語発達は明瞭な初語が1歳3ヶ月、二語文が出現したの

は2歳2ヶ月であった。必ずしも表出言語の出現が早い時期ではないが、一つひとつ、自分の行動や確認した事柄を言語化していく姿は、内面的な思考がしっかりとしている印象をもたせる児であった。観察は、児が1歳10ヶ月時点から2歳半までの間、毎月1回、友人宅に出向き、約1時間から1時間半の間、その時々の児の好きなあそびを自由にあそんでもらう場면을対象とした（風邪等のために2回、休んだ月があり、記録は1歳10ヶ月、2歳、2歳2ヶ月、2歳3ヶ月、2歳5ヶ月が主である）。記録はDVDカメラに収めたが、2歳半時点の記録が録画ミスのために撮影されなかったため、2歳半の記録は、その場での筆記記録を元にした結果のみを対象とする。これらのあそび場面に加えて、母親にはその時期の児の様子について様々な角度から自由に話してもらうインタビューを行った。したがって、インタビュー内容も検討の対象の一部に含めている。なお、分析は、児の発語と母親の発語、その場でのやりとりの様子を書き起こしたものを使用した。児の発語はすべて「述べる」行動に含まれるが、以下、本研究で対象とするのは、時間軸、二種類の対比的認識の発達に関わるものである。

結果

以下では、1歳10ヶ月～2歳半の各時期の特徴を時期ごとに区分して見ていく。具体的には、共有テーマの特徴とそこでの児と母親との関わりの概要を記す。さらに、児の「述べる」行動の特徴から、各時期の認識の発達について考察する。

《1歳10ヶ月》

共有テーマの特徴

表1にあるように、この時期の共有テーマの特徴の一つは、母親の行動をじっと見てその行為をなぞり、同じモノを持って同じようにしてあそぶことにある（例；サーキット上で一緒に車を走らせる）。母親に母親の車を渡す場面もみられ、母親からのインタビューでも、モノを渡すやりとりがブームになっている時期とのことであった。

お描きの場面では、一緒に色鉛筆を持つものの、同時に描くのではなく、児が自ら「マウー（丸）」と言いながら描いた時に母親がその言葉をリピートしたり、母親が描いたものを児が上から塗りつぶすなどしていた。母親が描いたものに対して母親が「I君の好きなこれなーに？」と尋ねると「ゾウサン」と答える

など、問いを受けとめて返すやりとりもはっきりと成立していた。また、児が自分で持っている乗物のフィギュアを寝転ばせたり、起こしたりする行動に合わせて母親が「ねんね一起きた」と繰り返し意味づけるやりとりも、自分の行動とぴったりと合う言葉が連動することが嬉しい様子であった。

「述べる」行動の特徴

この時期の時間軸の特徴は、何かを見つけた時に「アッタ」という発語で完了を言語化することである（表1参照）。例えば、母親とサーキット上で木を立てていたときに、木が立つと「アッタ」、探していたものを見つけた時に「アッタ」と発言する場面が度々見られた。他の例としては、テレビが終了した時に「オワッタ」、車が通った時に「トオッタ」などが該当する。

対比的認識の発達に関しては、この時期には「オオキイ」や「ッチョ」（一緒）という比較に関わる言葉が現れていたが、大小の関係が対となって表象されているわけではなく、生後4ヶ月の弟の足を見た後に自分の足を見て「オオキイ」、その後筆者の足を見て「オオキイ」と発言していた。

以上をまとめて、この時期は、一つひとつの物事を完了という形で区切りをつけたり、その時の状態像、そのモノの名前（名称）を言語化することが主たる時期であった。

《2歳0ヶ月》

共有テーマの特徴

2歳時点での共有テーマの特徴は、1歳10ヶ月時点と同様に、共に同じモノを持って同じようにしてあそぶことである（例；ビッグ建設現場でのあそび、積み木あそび①、③、表1参照）。以前よりも強く「ママ」といって母親にモノを渡して一緒にやることを強く求める様子も見られた。しかしながら、その一緒の求め方に以前とは異なる点が幾つかある。一つは、母親が玉を取ろうとしたときに「デタ？」と語尾を上げて確認したり、母親が「ここ、いい？」と玉を転がす場所を確認すると「イイ」と語尾を下げて応答するというやりとりが見られた点である。相手の意向を確かめたり、相手の意向に応じるというやりとりは、他者の目に見えない心的状態に気づきはじめた二歳代前半の特徴として木下（2008）が述べていた点と重なるものである。また、積み木あそび①で見られたように、あらかじめ「タツ」といって積み木を立たせる前に自分の

1歳10ヶ月から2歳半に至る自己の発達

表1 あそびにおける共有テーマと「述べる」行動の特徴（1歳10ヶ月と2歳）

（上表が共有テーマで、下表が「述べる」行動）

<1歳10ヶ月>

あそび	サーキット上で車を走らせる	フィギュアの乗物を使ったやりとり	お絵描き
共有テーマ	一緒にサーキットの木を立てたり、車を走らせる	フィギュアの動きと言葉を一致させて笑いあう	描くことを媒介にした対話的やりとり
児の主な行動	母親が始めたことを模倣することが多い。母親に、母親の車を渡すなど、渡すやりとりが多い	ライオンのバス（ガオー）を寝転ばせたり、起こしたりを何度も繰り返す	「マウー（丸）」とってぐるっと丸を描いたり、母親が描いたものの上から塗りつぶしたり、母親の質問「これ何？」に「ゾウ」などと答える
母親の主な行動	児のやりたいことを行動から推測し、木を立てることを助けたり、車で児を追いかけると、文脈を作っていく	児の行動に合わせて「ねんね一緒にきた」「ねんね一緒にきた」を繰り返す	児の発言をリピートしたり、質問をしたり、児の好きなものを描くなどする

<2歳0ヶ月>

あそび	『ビッグ建設現場』で玉を転がす	積み木遊び①	積み木遊び②	積み木遊び③	シャボン玉遊び
共有テーマ	母親と一緒に玉を転がす（一人で遊ぶことも多いが、母親に母親の分を渡し、一緒にやることを求める）	積み木を平らなところに一緒に立てて、「立たなかつたり、立ったりする結果」を意味づける（母親にも母親の分を渡し、一緒にやることを求める）	細長い棒に靴の形の指人形をつけて、一緒に動かしたり、つけたり外したりをする	一緒に靴の形の指人形を2つ、指にはめて、積み木をけつたり、積み木を滑り降りたりする（母親にも母親の分を渡し、一緒にやることを強く求める）	母親がふくシャボン玉を児が様々な仕方ですつしたりするやりとり
児の主な行動	建設現場のおもちゃで、小さい玉をたくさん滑り台のようなところで転がし、1カ所に集めて「ジャー」といって出す。対比に関する言葉多数。「アレ？」「デタ？」など、確認する言動も現れる	立たせる直前に「タツ」といったり、立たせる前に積み木の色を言って積み木を立たせようとする。立つと「タッター」、立たないと「ザンネン」などという	母親がつけてくれた靴の指人形を動かす。指人形を取った後に自分でつけようとするが、うまくつけられずに「タタン」「トレン」などという	母親の真似をして、指人形を動かす	しゃぼん玉を手ですつしたり、息をふきかけたり、母親の真似をしてうちわではいたりする。消えると「キエチャッタ」と喜び、はたいてシャボン玉が小さくなると「チツチャイ」といって喜ぶ（母親が児にしゃぼん玉をふかせると、一度、成功）
母親の主な行動	一緒に玉を転がす。大きい玉を転がしたり、児の意向を「ここ、いい？」などと確認しながら一緒に遊ぶ	児が「ママ」といって渡す積み木を受け取って一緒に立てたり、母親自らも一緒に積み木を立てる。児の「タツ」という発言に「ここなら立つかなあ」といったり、児が言う積み木の色をリピートしたり、「がんばれーがんばれーやってみー、そーっと」などと励ます	「ママとるの？ つけるの？」と児の意向を確認して、靴を積み木につける	母親が先に見本（滑り降りたり、とことこ歩く様子）を見せて、文脈を作る	シャボン玉をふいて、児の行動を笑って見守っている

月齢	言及する時間軸の内容	対比的認識の発達	その他の特徴
1歳10ヶ月	<p>☆自分の行った行動や物事の完了</p> <p>「アツタ」…木のおもちゃを立てた時、おもちゃの車を門の中にくぐらせた時</p> <p>「オワッタ」…DVDが終わったとき</p> <p>☆自分の関与する現在の状況（状態）</p> <p>「ナイー」（長い）…長い線を描いた時</p> <p>「モイー」（重い）…重いケースを持った時</p>	<p>☆比較の萌芽</p> <p>「オオキイ」…弟の足を見た後に自分の足を見た時に自分の足について言及</p> <p>「ツッチョ」（一緒）…筆者のビデオカメラと自分のおもちゃのカメラを両方を見て</p>	<p>☆不在についての言及</p> <p>「ナイ」…児がいないことについて</p> <p>「バイバイ」…母親が描いたゾウを色鉛筆でなくり描きで消したとき（不在を意味）</p>
2歳	<p>☆自分の行った行動や物事の完了に対する意味づけ</p> <p>「ザンネン」…遊んでいた玉がケースに入らなかった時</p> <p>「ムリ」…立たせようとしたものが立たなかった時</p> <p>「タタン」…積み木をうまく立てられない時</p> <p>☆予想やこれからしようすることに予め言及</p> <p>「タツ」…積み木を立てる前に「立てよう」というように</p> <p>「ムリ」…事前に結果を予測して</p>	<p>☆対比的認識の発達（比べる主体になる）</p> <p>「イツチョ」…シャボン玉で母親と遊ぶ場面と泡ぶくのシャボン玉の絵本の一場面との同一性に言及</p> <p>「チツチャイーオツキイ」の対：小さな灰色のおもちゃの玉を見て「チツチャイ」、隣の大きい白い玉を見て「オツキイ」</p> <p>「イッパイー」…小さな玉がたくさんある様子を描写</p> <p>☆能動と受動の混乱</p> <p>「タタン」と「トレン」…母親に「タタン！タタン！」とあって、母親に要求する。母親は一方に靴下をつけた小さい丸棒ノ反対側にもう一つの靴下のおもちゃをつけてほしいのか、ついているものをとってほしいのか分からず、「とるの？ つけるの？」と尋ねるが、「タタン」という。母親が意図を汲んでつけたが、今度は「トレン」といって違うことをアピールするが、最後はもういいといわんばかりにやめてしまう</p>	<p>☆色への言及の開始</p> <p>「キイロ」「アカ」…「キイロ、キイロ」といって母親に黄色の積み木を渡す。青の積み木を「アカ」という（理解はまだ曖昧）</p> <p>「シロ、シロ」…自ら色を言って色探しをする</p> <p>☆語尾を上げ下げして、相手の意向を伺う発言の開始、疑問や不思議を表現</p> <p>「イイ」…母親に「いい？」と聞かれて「イイ」と語尾を下げた答える</p> <p>「デタ？」…母親に玉が出たか否かを確認</p> <p>「アレー？」…逆方向に玉が転がっていったのを見て</p>

意図（つもり）を言語化したり、立たなかった時に「ザンネーン」といって“だめだった”という結果を意味づけることを、母親と一緒に言語化することがあそびになっているのもこの時期の特徴である。以下、これらの点と関連づけながら、児の述べる行動の特徴をみていく。

「述べる」行動の特徴

時間軸に関するこの時期の新たな言動は、先述したように、あそんでいた玉がケースに入らなかった時に「ザンネーン」、積み木を立たせようとしたがうまく立たなかった時に「タタン」と言うなどが見られた点である（表1参照）。さらに2歳時点からは、「タツ」と言うてから実際に立たせたり、事前に立てないであろうという結果を予測して「ムリ」と言う姿が観察された。直近の未来に向かう“立たせてみよう”という態度と“だめだった”という結果を意味づける態度が言語化されていると考えられる。

概念的認識に関わる対比では、「オオキイ」という発話は1歳10ヶ月時点で見られていたが、「チツチャイーオッキイ」が対となって現れたのは2歳になってからである。2歳時点では、異なる場面（自分が現実にはシャボン玉で母親とあそぶ場面と、シャボン玉であそぶ様子が絵本の中に描かれている場面）の類似性に気づき、シャボン玉であそんでいる最中に、泡ぶくの場面が描かれている絵本の一ページ（母親が直前に読んでくれたもの）を開き、同じであることを母親に訴える様子も観察された。

また、この時期から自他視点の混乱を示唆する現象が観察された。例えば、指人形の靴を丸い棒につけてほしい時に「タタン」や「トレン」といって母親に訴えるものの、母親はつけてほしいのか、既に一方についている靴を取ってほしいのかがわからず、「つけるの？とるの？」と確認していた。

加えて、この時期の特徴は、先に述べたように相手の意向を確認する発話や相手からの質問に応じる言動が現れている点である。同様の姿は、母親からのインタビューでも報告されている。人形を使ったあそびで、一方の人形で「元気？」と尋ねると、もう一方の人形をもった児が「ゲンキ」と語尾を下げて答えることが同時期に可能になったという。母親は、「ただマネをしているだけでなく、返していることがわかる。言葉が前よりいっそうわかってきたように最近思う」と述べている。

あそびとしては母親と同じ行動をすることが主という点で1歳10ヶ月時点と類似するが、その活動の結果の言語的な意味づけ（ざんねん）を共有するようになっている点や、相手の意向を確認するといった言動が出現している点で、あそびの質、もう少しいえば他者との共有関係の持ち方に変化が現れてきた時期といえよう。

《2歳2ヶ月》

共有テーマの特徴

2歳2ヶ月時点の共有テーマの新たな特徴は、児の中にやりたい行動が明確にあって、その行動の一つひとつ繰り返すという自己確認的なあそびに母親が参与するという形態が見られた点である（例；ペットボトル倒し、大型絵本①:表2参照）。これらのやりとりでは、児が実際の行為を遂行し、母親はその行動を見守り、児の言語化をリピートするという関わり方が主であった。具体例としては、絵の具で色づけされた色水（赤、青、黄色、緑）が入ったペットボトルを目の前に置いて、まず、特定の色名を言って、足で蹴ってそのペットボトルを倒していくあそび等が該当する。こうしたあそびは、いずれも児が自発的に始めたものであるが、その元には、兄や母親の行うあそびを見ていた経験があるものと思われる。また、パターンのではないが、大型絵本で家を作ろうとする場面でも、まず、自分で作りたいもののイメージがあり、それがうまく作れない状況で母親が助言する姿が観察された（大型絵本⑤、⑥）。この時期は「コレコレコレ」といって要求を表現する様子が頻繁に見られ、自分の考えたあそびをしたいこと（母親にはそれを見てほしい、もしくはそれを手伝ってほしいこと）が伺われる時期であった。

さらに、以前とは異なる特徴として興味深かったのは、母親が率先する形ではあるものの相補性のある視点の共同構築的あそびが現れたことである。例えば、大型絵本②の場面では、アンパンマンの仲間たちのフィギュアを上から次々と落とす児に、母親がそのキャラクターらしい声のトーンや言い回しを真似して応じる姿が観察されており、児は、その声のトーンの違いを喜んでいて。また、大型絵本④にあるように、母親は、歌の一部のパートを児に歌ってほしくて、一部を歌った後に待っており、児は母親からの働きかけに応じて期待されるパートを歌っていた。これらの母親の行動は、無意識的なものであるとはいえ、相手の

1歳10ヶ月から2歳半に至る自己の発達

表2 あそびにおける共有テーマと「述べる」行動の特徴（2歳2ヶ月）

（上表が共有テーマで、下表が「述べる」行動）

<2歳2ヶ月>

遊び	シャボン玉遊び	ペットボトル倒し	大型絵本①	大型絵本②
共有テーマ	母親がシャボン玉をふき、そのシャボン玉を児がつぶすことを中心にしたやりとり	色の名前を確認して並べ、一つひとつボールで倒すという決まったパターンの行動を繰り返す（行動主体は児で、母親は言葉をかける）	サイコロをふって進むという型の繰り返し（行動主体は児で、母親は言葉をかける）	アンパンマンフィギュアを児が落として、母親がその役割（視点）に立って言語化
児の主な行動	床の上でつぶしたり、上に行ってしまうシャボン玉を机の上に登ってつぶす。アンパンマンのフィギュアを両手でもってつぶす（シャボン玉を吹く側の役割をしようとするが、「吹きたい」ことが主で（うまく吹けないが）、母親がつぶす役になるという役割交替を期待しているわけではない）	4本のペットボトルに入った色水の色（赤、青、黄色、緑）をいって、4つのペットボトルを立たせ、1本ずつ、布製のボールを目の前に置いて倒していく（3回繰り返す）	サイコロをふって、好きな数字をいって、自ら大型絵本のすごろくの上を歩く。数字を「6」などと言語化する際に、度々、母親の顔を見て笑って歩く	母親が出してくれたアンパンマンフィギュアを「ヒュードン」といって上から一つひとつ落とす
母親の主な行動	シャボン玉をつぶす様子を見て一緒に笑う。「アンパンチ！」などと言葉を添える	色をリピートして確認したり、ボールをけってうまく倒れると「やったー！」、倒れないと「おいしい！」という	児のいった数字をリピートする	オムスピマンは「痛いぞぞんす」、メロンパンナちゃん「あーいたいわー」などと役ごとに表現を変えて発言

遊び	大型絵本③	大型絵本④	大型絵本⑤	大型絵本⑥
共有テーマ	「スタート・ゴール」といいながら、車を一緒に走らせる	アンパンマン号を走らせながら、アンパンマンの歌を共同で歌う	大型絵本を立てて家を作る（行動主体は児で、母親は出来ないことを助ける）	階段を作る（行動主体は児で、母親は助言する）
児の主な行動	「スタート」といってすごろくのスタート地点から車を走らせ、ゴール地点で「ゴール」ということを繰り返す	「ゴー」と自分のパートを笑いながら歌う	使用していた大型絵本を立てて開き、隣の部屋から別の大型絵本も複数持ってきて立てて、家を作る	家作りで使った大型絵本を倒し、その中の1冊で階段を作ろうとする。母親の助言を受けて、椅子を使用して作る
母親の主な行動	児と一緒に別の車（児が母親の分も渡したものを）をスタート地点からゴール地点に走らせる	「進めー、進めー僕らのアンパンマン号。ゴーゴーゴー、アンパンマン」と歌い、次のパートを児が歌うことを期待して、間をおく	何を作るつもりかを尋ね、児のお家作りを手助けする。出来上がると「が作ったお家、が作ったお家だね」と声をかける	椅子を使用した方がいいと助言

月齢	言及する時間軸の内容	対比的認識の発達	その他の特徴
2歳2ヶ月	<p>☆開始から終了まで、自分の始めた活動をやり遂げて区切りをいれる</p> <p>「スタート・ゴール」の対…大型すごろくの上でおもちゃの車を走らせるとき、スタート地点から「スタート」といって開始し、ゴール地点で「ゴール」と言語化することを繰り返す</p> <p>「スタート」…大型すごろくで、「スタート」といってさいころをふり、「ロク（6）」と自分で自分が動く「シマイ」（おしまい）…自分で始めた遊びを終了する時</p> <p>☆認識状態に言及 「コレ シラナイ」…絵本を見て言及</p>		<p>☆二語文の出現（「コレ シラナイ」）</p> <p>☆意思の明確な表明</p> <p>「シナイ」…母親の「ジャンプできる？」という提案にすぐさま「シナイ」と答える</p> <p>「コレコレコレ」…要求を表現するとき多用</p> <p>☆色や形への関心、自己確認</p> <p>「ミドリ」…まず、「ミドリ」と言ってからDVDケースの文字（緑色）をさす。色探し盛んに行われる</p> <p>「サンカク」「シカク」「マル」…大型絵本で○、△、□を見つけてでてでぞりながら正しく言及</p>

視点の違いや、一緒に一つの歌を完成させる上でパート（役割）を補いあう共同構築に参加させているものと思われる。

「述べる」行動の特徴

先に述べたように、この時期は自分の中でしたい活動をしようとする意思が強く現れ、明確な二語文が出現した時期である。時間軸に関する認識の特徴として

は、自分の中で一つの活動の開始と終了を一括りにして区切りをいれる姿が観察された（表2参照）。具体的には、「スタート」といって実際に大型すごろく上で車を走らせ、ゴール地点に「ゴール」といって到着するあそびを繰り返すこと（大型絵本③）、すごろく上でサイコロをふって好きな数字を言った後に、すごろく上を歩くというパターンの行動を繰り返すことである（大型絵本①）。始まりと終わりを自分の中で明

確に区切っている姿に、活動の開始と終了を決定する主体としての児の姿が感じられる。

加えてこの時期は、じゅうたんの上で母親が吹くしゃぼん玉をつぶしてあそんでいる時に、自分の背丈よりも高く上になってしまうシャボン玉をじっと見て少し間を置いて考える様子が見られた。そして、その直後に、「ウエウエウエ」といって机の上に登り、シャボン玉をつぶしていた。いったん間をおいて自分の中で考え、考えたこと（机の上でしゃぼん玉をつぶすこと）を実行していることを伺わせる事例である。これに関連する事柄として、同じ日に、絵本を見ながら「コレシラナイ」と言及する姿も見られている。「考える」という心的活動が本格的に開始されたのは本児の場合は2歳半時点であると思われるが、この時期にその萌芽があることが伺われる。

以上をまとめて、この2歳2ヶ月時点は、同じあそびを一緒にするという並行あそび的なあそび方は存在するものの影をひそめ、色の名前の言語化等を含む自己確認的な型のあるあそびの繰り返しが出現したと同時に、母親と視点の違いを共同構築するあそびが現れた。「述べる」行動をみても、「スタート」と「ゴール」が対になって表現されるなど、自分の中で明確に活動の開始と終了を決定する姿が目立っており、児の中に「考える」主体が現れ始めた兆しを感じる時期であった。

《2歳3ヶ月》

共有テーマの特徴

2歳3ヶ月時点の共有テーマの新たな特徴は、主に、二点ある。一点目は、目標（パズルを完成させる、見本と同じ形をキューブで作る）がある状況で、他者と活動を共有しようとする姿が見られるようになったことである（パズル、しまじろうのキューブあそび①、②、③；表3参照）。これらのあそびは、パズルではピースを台の形に合わせる（一緒にさせること）、キューブのあそびでは、見本の絵を見て、それとキューブの柄を一緒にしたいという概念的なレベルでの一緒への志向性の強さが背後にあると思われる。

二点目の特徴は、母親が先導しながら、見えに関する役割交替的なあそびが現れたことである（何が見えるかなあそび、同じ顔にする？あそび）。これら二つのあそびでは、母親と児が「見られる人—見る人」の役割を交替しながら、あそびが進行していく。「何がみえるかな？あそび」では、トイレトペーパーの芯から見えるものを答えあうという点で「見える側の人

と見る側の人」の役割交替が問題になる。「同じ顔にする？あそび」は、絵カードの顔の表情の側を相手に見えるようにして、同じ顔にするための役割交替を楽しむあそびである。いずれも、母親があそびの土台を作りながら、児が役割交替をしやすいように援助しているが、役割交替を最初にしようと試みるのは、児の自発的なものであった。

これらのあそびが現れた背後には、問題部分で述べた二種類の対比的認識（概念レベルの認識、自他視点に関する認識）の発達が密接に関連していると思われる。以下でその点について詳細にみていく。

「述べる」行動の特徴

概念的レベルの対比的認識は、この日の児の発話の中で非常に印象的な部分である（表3参照）。具体的には、二つのモノが一緒であることに加えて、その違いや性質について対比的に述べるというものである。児は初回の観察時から筆者の持参するビデオカメラに関心をもっていたのだが、2歳3ヶ月時点では、自分のおもちゃのカメラと筆者の本物のカメラが「イッシュヨ」と言及しつつ、そこからの見えを実際に確認し、「コッチミエン—コッチミエル」と違いを対比していた。さらに、こうした見え方の違いを「オモシロイ」と言及したのである。さらに、同一カテゴリーに属するモノの共通性や違いについて、対比的に述べるという姿もある。これは、「クツシタ」といって、筆者や自分、母親、弟の靴下を見て「イッシュヨ」と言及しつつ、その中の違い（色や長さ）に着目して笑うという姿である。母親からのインタビューでも、この時期は、「オモシロイ」という発話が頻発していたようである。単に似ているものを「イッシュヨ」と言及するだけでなく、そこに含まれる差異性（違い）がわかるからこそ、「オモシロイ」という認識、そして感情が生まれることを伺わせる事例である。

次に、2歳3ヶ月時点での対比的認識として自他視点の対比に関わる例を取り上げたい。これは、一人二役会話ともいえるもので、キューブを用いたあそび場面で自分で「ミエルカナ？」と尋ね、すぐさま「ミエンミエン」と言語化するというものである。尋ねる人と応答する人という立場（視点）の両方を言語化しているものと思われる。少し異なるが、同様の事例として、一つの言葉（ブータ）が、キャラクター（しまじろうの「ブータ」と呼ばれるキャラクター）と、名詞一般の「ブータ」を指すことの二重性に気づいたのか、

1歳10ヶ月から2歳半に至る自己の発達

表3 あそびにおける共有テーマと「述べる」行動の特徴（2歳3ヶ月）

（上表が共有テーマで、下表が「述べる」行動）

<2歳3ヶ月>

遊び	パズル	紙製ロボットあそび①	紙製ロボットあそび②	何が見えるかな、遊び	しまじろうのキューブ遊び①
共有テーマ	アンパンマンとその仲間たちの描かれたパズルをはめていく	紙製のロボットを、少し離れた場所からボールを投げて倒す（活動の主体は児）	ロボットにボールを当てて遊ぶから戦い遊びへ（攻撃したり、こしょくったり）	トイレットペーパーの芯（ロボットの手となっているものが取れてしまったもの）を顔の一部に当てて、何が見えるかを当てあう（児は母親に助けられて役割交替をする）	目標（見本と同じものを再現する）がある状況で、他者（母親）と活動を共有しようとする
児の主な行動	パズルを母親と一緒にはめていく（自分がはめた後に母親にもはめるように促し、一緒にやるように求める）。「後でやる」という意味で「アト」といっていったんあるピースを置いて別のピースに持ちかえる姿が2回ほど見られる	ロボット（ティッシュペーパーの箱やお菓子の箱等を3つ重ねててガムテープでくっつけたもの）を少し離れた場所から倒す	児がロボットにボールを当てていると、母親がロボットを持って児を攻撃したり、こしょくったりする。児は「キック」といったり、ボールでロボットを押さえつけようとする。途中からもう一つのロボットを持ってきてロボット同士で対決する	母親がトイレットペーパーの芯を自分の目に当てた後に、児が自分で持って、穴からのぞき、「ママ」という。その後、母親が芯をもって母親自身の鼻に当てて「何が見える？」と尋ねると児が「ハナ（鼻）」と答え、児が母親の耳やおでこに芯を当てて芯の穴から見えるものを「クチ」「カミノケ」と言及する。鼻や口に当てると、自分の鼻や口に当てると（役割交替をしようとしている）母親に見えるように芯を母親の目に向けてることができず、芯を顔に押し当てている状態になる。母親が芯をもって、援助する（詳細は、母親の行動参照）	四角のキューブを組み立てると、見本と同じ絵（動物など）ができるもので、見本と同じ絵（象など）を作ろうとする。「ドウブツエン、ドウブツエン」といって一面一面、キューブに描かれている柄を「ソウ」「シマウマ」などと確認する。キューブを回すと絵が変化する様子を楽しんでいる。象の描かれた二つのキューブを母親と一緒にまわして、くっつける
母親の主な行動	児と一緒にパズルを完成させる。児に「わかる？」と尋ねたり、「できるよ」と励ます	児の投げたボールが当たって倒れると「やったー」、倒れないと「ざんねーん」という。時々、母親も児に代わってボールを投げて倒すが、見守り、声をかけるのが主。途中からロボットをもう一つ出して、二つの紙製ロボットを倒す遊びに	ロボットを盾にして、ロボットの手（トイレットペーパーの芯）で、児をこしょくったり、押ししたりする	「お口がみえるー、のかわいいお口が見えるー」などといって、児の顔の見える部分に言及する。お互いに見合っているように、母親が適宜、芯を持って見える位置を調整したり、言葉をかけることで遊びが成立	児が作ろうとしているもの（ソウ）が再現できるように、キューブを回したり、「これなに？」と確認して、絵が組合わさるように援助する

遊び	しまじろうのキューブあそび②	しまじろうのキューブあそび③	しまじろうのキューブあそび④	同じ顔にする？あそび
共有テーマ	目標（見本と同じものを再現する）がある状況で、見本と似たものを作って自分で遊ぶ（活動の主体は児）	目標（見本と同じものを再現する）がある状況で、他者（母親）と活動を共有しようとする	キューブを回して、見え方が異なることを楽しむ（活動の主体は児）	丸い絵カード（片面に顔の表情（怒り顔、笑顔、困り顔）が描かれ、もう片面にモノ（車、いちご、犬）が描かれたカードの表情の方で、カードを顔の横に置いて同じ表情にしあうあそび
児の主な行動	見本に描かれるのを見て、台の上にキューブを並べ（途中から見本は関係なくキューブを並べていく）。出来上がると「デキタ！」といって、滑り台のような形の上で一つのキューブを持って「トントントン、スー」といって登って降りる動作をする。一度壊して再度同様のものを作り、今度は「オリマース」といって台から全てのキューブを落とす	「カイダン、カイダン」といって、見本にある階段を作るように「ママ」といってリクエストする。母親が作る様子を見ており、出来上がると、一つのキューブを持って「トントントン、ワア、タカイ」といって登って、「トントントントントントン」といって降りる	キューブのしまじろうのキャラクターが描かれている部分に回して、3つのキューブをつなげる。その端を両手で持つて、「デンデンデンデン、デンデンデン！」という言葉に合わせて、回していき、見えが異なることを楽しむ	母親の主な行動部分に記載したように、母親が同じ顔にする遊びを開始する。母親が児の顔に絵カードを当てて、母親の「にこっ」や「プンプンは？」という声かけに合わせて同じ顔にしようとする。その後、自分で、笑顔の絵カードを持って、顔の横でスライドさせて「プンプン！」といった後に、カードを確認して「チャウ！」といって「ニコニコ」と言い直す
母親の主な行動	児の発話をリピートする形で、ほとんど介入しない（弟との関わりが主）	児のリクエストに応じて、見本と同じ階段を作る	児の声かけにあわせて、「デンデンデン！」などと声をかける	母親が「同じ顔にする？」といって絵カードを母親の顔の横において、カードと同じ表情をして見せる。怒った表情の時は「ママの怖い顔」、笑顔のカードの時は「にこっ」といいながら、やってみせる。その後、児の顔に当てて、児がやってみるよう促す。その後、再度母親がやってみせるという形で役割交替する

月齢	言及する時間軸の内容	対比的認識の発達	その他の特徴
2歳3ヶ月	<p>☆行為の最終地点から現在の状況を見て、その状況について述べる表現</p> <p>「アト」…パズルをしているとき、今はこのピースははめない（今はしない）ことを言及し、実際に後ではめる</p> <p>「サイゴ、ミラミン」…みみりん（キャラクター）のキューブを最後に並べる時、その直前に言及</p> <p>「マダ」…母親に「できた？」と尋ねられた時（まだ、完成していない状況で言及）</p>	<p>☆対比的認識の深化、発展（①二つの対象の見え方の違いや性質（状態）について、対比的に述べる）</p> <p>「イッショ」→「コッチミエーンコッチミエル」→「オモシロイ」…筆者の持参した本物のビデオカメラと自分のおもちゃのカメラを対比して、「イッショ」と述べつつ、自分のカメラは見えないが、本物は見えることに對して「コッチミエーンコッチミエル」と言及。その後、「オモシロイ」と嬉しそうに述べる</p> <p>「イッショ」…よくこの言葉を発し、①見本と一緒にものを作ろうとする、②一緒に否か（共通点と差異点）を探ろうとする行動が多く観察される</p> <p>☆対比的認識の深化、発展（②（自他の）視点の対比に係る興味深い事例）</p> <p>「フータ！フタ！」（笑）…児が「コレハ フータ（しまじろうの豚をモチーフとしたキャラクター）」といった後に、母親が「豚？」と尋ねると、おかしように笑う（一つの言葉の二重性がおもしろい事例）</p> <p>「ワア、タカイ」…おもちゃの幼稚園バスをおもちゃの階段の頂上に登らせた時（相手の視点に立っている述べ方）</p> <p>「ミエルカナ？ーミエンミエン」…おもちゃのキューブで形を作っている時に、問う人と応える人を再現（一人二役的）</p>	<p>☆相手の意図を事前に考慮した対人行動（木下、2008）</p> <p>「ツライー」…母親に「大丈夫？」といわれることを期待して（わかった上で）言及、実際にそういわれると、嬉しそうに「ダイジョウブ！」という</p> <p>「ハナミス？」…母親が第（4ヶ月）の鼻を見て「おはな」と小声で言ってティッシュを取りにいこうとする時に尋ねる</p> <p>☆言語表現（語頭や語尾の表現）の豊かさ</p> <p>「アレレ？」「エエト、イッショ」「ミエルヨ」「アガッテ！アガッテ！」</p>

「ブータ」「ブタ！」と言っておもしろがる様子も観察された。また、キューブで作った階段や滑り台の上にキューブを置いて「ワア タカーイ」などという姿も頻繁にみられ、これも他者の視点に立っている述べ方として、この時期に見られた特徴である。

時間軸の形成に関する2歳3ヶ月時点での特徴は、活動（あそび）の最中に「今はしない」という意味で「アト」（後で、という意味）といて一端その行為を棚上げにしたり、まだ完成していない状態であることを「マダ」と言う姿が観察されたことである。これらは行為の最終地点から現在の状況を見て、その状況について述べる表現であり、目標に向かった活動を行う上で大切な役割を果たしているように思われる。

以上をまとめて、この時期の共有テーマの特徴は、目標志向的なあそびを共にしようとしたり、見えに関する役割交替あそびが出現したことである。その背後には、概念レベルの対比的な認識や自他視点の形成途上の姿があると思われる。

《2歳5ヶ月》

共有テーマの特徴

2歳5ヶ月時点での共有テーマの特徴は、主に四点ある。まず、児がこの日に最も関心を示したのは、筆者のいつも持参するビデオカメラのズームボタンを操作すると視界が変化することであった（表4参照）。何度も筆者に「オッキカー チッサカー」と言ってカメラに映る母親や弟の姿を変化させるようにリクエストすると同時に、ズームボタンの操作の仕方にも関心をもち、自分で大きくしたり小さくすることも喜んで行っていた。「こうしたら、こうなる」という因果関係に関心をもち始めているこの時期の児の特徴がよく現れているあそびである。

二点目は、玉を転がすあそびでの「一緒に」の形態が質的に変化した点である。1歳10ヶ月時点から、母親と玉を転がすあそびは何度も行っていたが、この日は、大小様々なボールを転がすこと自体を目的にするのではなく、自分と母親のボールを同時に転がし、母親のボールが滑り台の脇から落ちてしまうと、児が自ら拾いにいき、再び転がし、「ダイジョウブ ガンバレーガンバレー」と母親の玉を応援するという姿が見られた（DXマーブルレースあそび）。これは、相手の視点に立って相手を応援するという形であそびを共有することが可能になりつつあることを示唆している。これに関連して、この日は児の使っていた線路を弟が

壊したり、パズルを持ったりすると、「ダメ！ダメ！コワシタ！」などといって弟を非難する姿が観察された。また、自分の体に当たって線路が壊れてしまった時には、「ゴメン！ガタオシタ」といって謝罪する姿も観察されている。相手を応援する、自分を含めて壊した行為を戒め、時に謝罪するという対他関係のもち方があそびの中でも随所に見られている。

さらに三点目の特徴は、プラレールのあそび①、②にあるように、母親の援助のもとで文脈が作られ、母親と共に、よりごっこ的な世界であそびを楽しむようになった点である。プラレールあそび①では、お客さんを乗せて電車で走ること、駅で待っている人と交替するといった文脈が現れ、プラレールあそび②では、自分の体や人形、積み木などを使ってトンネルを作って電車を通らせることがあそびのテーマになっていた。こうした文脈は、まだ児自身では十分に作れないため、母親がまず、土台を作ることが必須ではあったが、この時期の児の関心にぴったりと合うあそびのようであった（インタビューでも、現在、この種のあそびが好きという母親からの報告があった）。

最後に、この時期のパズルのあそび方の特徴として、以前よりも、独り言のように考えたことを口に出しながらパズルを行うようになっていた点が挙げられる。「～デショ」「～デショ」といいながら、自己確認的にパズルのピースをはめていったり、ピースをパズルの台に当てて当たると「ピンポーン！」、外れると「ブーブーザンネーン！」などという言葉が聞かれたのもこの時期の特徴である。母親からのインタビューでは、自分で描いたものを持ってきて「コレナンダ？」と尋ね、母親の答えに納得すると「ピンポーン！」、納得しないと「ブーブー」というあそびが流行っていると報告されている。

「述べる」行動の特徴

共有テーマの特徴で挙げてきた点と重なるが、この時期の述べる行動の大きな特徴は、「こうしたら、こうなる」という因果関係に関心をもち、因果関係に関わる発話が多数現れた点にある（表4参照）。具体的には、「コレチイサクナッテル」といって、ビデオカメラのズームボタンを操作すると視界が変化することに言及したり、自分の体に当たって線路が壊れてしまったときに「ゴメン！ガタオシタ」といって謝罪する姿、弟が線路を壊してしまったときに、「ダメ！ダメ！コワシタ！」などといって非難する発話が該当

1歳10ヶ月から2歳半に至る自己の発達

表4 あそびにおける共有テーマと「述べる」行動の特徴 (2歳5ヶ月～2歳半)

(上表が共有テーマで、下表が「述べる」行動)

<2歳5ヶ月>

遊び	カメラのズームボタンあそび	「DX マーブルレース」を作って玉を転がす	ブラレールであそぶ①	ブラレールであそぶ②	パズル
共有テーマ	カメラのズームボタンを大きくしたり、小さくすることで、「こうしたら、こうなる」を確認する	玉を転がす土台を作り、児の玉と母親の玉と一緒に転がす	ブラレールの線路を組み立て、お客さんをのせて走らせる	走っている電車のトンネルになったり、積み木でトンネルを作る	言葉で確認しながら、アンパンマンのパズルをはめていく
児の主な行動	筆者の持参したカメラを何度ものそきこみ、見える様子を楽しむ。筆者がズームボタンを操作したことをきっかけに、ボタンを押すと大きくなったり、小さくなることおもしろくなり、「オキキク」「チツサク」とリクエストし、筆者がそれに合わせてボタンを操作すると喜び、どこを触っているのかにも関心をもち、自分でやってみる	土台を作る作業に一部参加し、母親の玉と自分の玉を上から一緒に転がす。母親の玉が途中で落ちてしまうと、母親が「ママの飛んでった!」ママの飛んでった!」といい、児が玉を取りに行き、再び、転がす。「ダイジョウブ、ガンバレーガンバレー」といって応援する	ブラレールを出して「マルクスルー」といって線路を組み立てていく。母親に手伝ってもらって組み立てる。途中で弟が線路に触ると「ダメ!ダメ!」と怒る。電車に貨車をつなげるように「コレモ」と母親に伝え、貨車をつけてもらって走らせる。母親が駅を置いて、「お客さんのせよかな」といって電車を止めて、母親がアンパンマンの仲間たちのフィギュアを置いた後ろの貨車に自分もフィギュアを「モットーノセル」といって乗せて、走らせる。待っているお客さんのことを「マッテルー」と何度もいう	母親がしまじろうのぬいぐるみを手にはめて電車を追いかけたりする姿を見て、そのシマジロウをもらって、シマジロウの足でトンネルを作ってくらせる。自分の足をトンネルにしたがり、身体全体でおおいかぶさるようになって、トンネルになったりする。「!(自分の名前)トンネル」などと言及。体の一部が電車に当たって電車が倒れてしまうと「ゴメン!」ガタオシタ」といって謝罪。母親が出してくれた積み木で自分からトンネルを作ろうとする。弟が線路を触って壊してしまおうと「アーK(弟の名前)ダメ!コワシタ!」といって非難する	ピースを一つひとつはめながら「ミエター」「メロンバナミエター」などと言いながらはめていく。弟がピースをもつと「ダメ!」と怒って「!ガー、!ガー」といって自分がやることを強調。アンパンマンの一部が見えると「ホラ アンパンマンタツツシヨ」という。ピースを見ながら「コレハーアンパンマンデシヨ」「コレハークリームパンナデシヨ」などといながら、はめていく。ピースが合うと「セイカイ!」違うと「フーザンネン!」などと言及
母親の主な行動	児の弟とともに被写体となり、「ママ見える?」などと尋ねる	土台を組み立て、「これ、ママの玉ね」などと声をかけながら、玉を転がす遊びをする	児の意向を汲み取りながら、児ができないこと(線路を丸くすること)を手伝ったり、「お客さんのせよかな」「まちえきーまちえきー、お客さんのつくってださーい」などと声をかけて文脈をふくらませていく	児の言葉をリピートしたり、見守る。児の姿を見て、新たに積み木を取り出すなど、あそびのバリエーションをひろげていく	児の言葉をリピートして「見えたねー。ドキンちゃんだねー」などと声をかけたり、「もうちょっとだねーもうちょっと」といって、励ます

月齢	言及する時間軸の内容	対比的認識の発達	その他の特徴
2歳5ヶ月	<p>☆体験や物事の区切り方のバリエーション、表現力が豊かに</p> <p>「コッチダッター」…上から玉を転がす遊びで、予想していた方ではないところから転がした玉が現れたとき、予想と違ったことを表現</p> <p>「ホラ アンパンマンタツ ツシヨ?」…パズルが完成した時に、事前の予想と同じ結果(アンパンマンができる)だった時</p> <p>「オイデッター」…おもちゃのカメラがどこにあるかわからず、母親も後ろの足下にあるといわれたときに(自分がおいておいたんだった)というニュアンスで表現</p> <p>「グルグルマワツテルー」…母親の周りをぐるぐる回っている自分の現在の状態を実況中継</p> <p>☆考えていることを示唆する表現</p> <p>「コレツヨイ ホントツヨイデシヨ」…「～デシヨ」という表現を多く使用する。他者への伝達の意図は薄く、自己確認的な要素が強い</p>	<p>☆対比的認識から原因と結果の因果関係への関心へ(責任の帰属、謝罪)</p> <p>「コレーチイサクナツテルー」「オオキクーチイサク」…筆者のカメラのズームボタンを触り、映る映像が大きくなったり、小さくなったりする様子を見て言及(「こうしたら、こうなる」という行動とその結果に対する関心が強い)</p> <p>「ゴメン、!(自分の名前)ガタオシタ」…自分の足に電車が引っかかってしまっ電車が倒れた時</p> <p>「ダメ!ダメ!コワシター、K(弟の名前)ダメー」…弟が線路を壊してしまったとき</p> <p>(母親より、同時期に「!(自分)ノセイ」「K(弟)ノセイ」と責任に言及)</p>	<p>☆相手への確認、応援、気遣い等の表現</p> <p>「ココ、イイ?」…この場所に玉を置いていいか、お客さん(フィギュアの人物)の位置がここでもいいのか等を確認</p> <p>「ナイノ?」…筆者が探し物を見つけれずに困っている場面</p> <p>「ハイテル?」…弟がミルクを吐いてしまい、母親がじゅうたんをふいている時</p> <p>「ダイジョウブ、ガンバレーガンバレー」…母親と玉を転がす遊びをしていたときに、母親の玉を応援</p> <p>(母親より)「コレナナンタ?」と自分で描いたものや磁石で作ったものについて尋ねてきて、母親の答えに納得すると「セイカイ!」、納得しないと「チャウ!(フープ)」と言う。</p>
2歳6ヶ月	<p>☆過去に言及</p> <p>(母親より)「!(自分)モイッター」(テレビを見ていて)※過去のことや思い出を語ると母親より</p> <p>☆認識状態に言及</p> <p>(母親より)「!(自分)、ダンボールメーロ シツテル」…自分が段ボールメーロを知っていると言及</p> <p>「シツテナイ」…絵本の読み聞かせ場面で、知らないことについて言及</p>		<p>☆好みや自分や他者のしたいこと、してみたいことに言及</p> <p>「!(自分)、ユーエンチ スキ」「ゴール シテムル」「S君(兄)モシタイ」</p>

する。誰が倒したのか、なぜ壊れてしまったのかについて思考を巡らせ、その原因となる行為を責める姿はこれまでになかったものである。久保田(1993)も2歳半頃より、「オネエチャンコボシタヨ ゴメンナサイ シナ」という形で、責任の所在に言及するようになる」と指摘しており、この時期に問責と抗弁という新たな対他関係が生じると述べている。母親からのインタビューにおいても、はっきりと「○○(弟や自分の

名前)ノセイ」といって責めたり、自分が悪い場合は謝罪する姿が見られると報告されている。これらは久保田(1993)で述べられている事柄と一致するものと考えられる。さらに、相手を意識した言動という点では、相手を応援すること、心配や気遣いの表現を用いる姿が幾つか観察された。具体的には、「ココ イイ?」といって玉を転がす場所を確認したり、「ナイノ?」と筆者の探し物がないことに対する気遣いや心

配と受け取れる表現、先にも述べた、「ダイジョウブガンバレー ガンバレー」と母親の玉を応援する発話である。

加えて2歳5ヶ月時点では、時間軸の表現にバリエーションが加わっている。印象的だった事例は、パズルを完成させ、アンパンマンが出来上がったときに「ホラ アンパンマン ダッタ ッショ」と表現したことである。これは、自分の予想していた出来事と実際に生じた出来事を対比させて、予想と一致していたという結果に言及する発話である。同様の例としては「コッチダッター」や「オイテッター」(表4参照)があり、これらはいずれも、生じた結果を最初の予測と対比させて意味づける出来事への自己関与的態度を示すものと思われる。さらに、この日には、「～デショ」という語尾をつけた発話が幾つか観察された(表4参照)。木下(2008)は、2歳6ヶ月～3歳を「思考や言語の自律した主体として表象される自己と他者」が成立する時期であるとし、この時期の一つの特徴として、一人二役会話が少なくなり、「内なる他者」の言葉を内在化していく過渡期としての言動が現れると指摘している。ここでの「～デショ」は、他者に伝達する意図は薄く、自己内で「～デショ、～デショ」と独り言をいっている様子であり、児の思考が外言として現れているものとも考えられる。

《2歳6ヶ月》

共有テーマの特徴

この時期の共有テーマの特徴は、本格的に言葉でテーマを立ち上げてごっこ的なあそびを楽しむようになった点である。「ミンナデ チュウシャジョウ！」とあって、しまじろうとその仲間たちの人形を並べたり、駐車場を作るなどを母親と共同で行っていた。また、迷路の本を出して、簡単な迷路をスタート地点からゴールまで道を外さないでできているかを確かめながら、取り組む姿も観察されている。

「述べる」行動の特徴

この時期の発話の特徴は、認識状態に言及する発話(「シッテル、シッテナイ」)が現れたことである(表4参照)。観察場面では、絵本を見ながら、「シッテナイ(知らない)」と発言したり、「Iシッテル」という発話が現れた。認識状態への言及は2歳2ヶ月時点で「コレシラナイ」という発話が現れていたが、この時期は、

自分の名前を出して「Iシッテル」と言ったり、知っていると知らない(シッテナイ)が対になって現れているという点で、自他の認識状態に本格的に気づき始めているといえるだろう。加えて、母親からの報告では、「S(兄の名前)君モシタイ」といって、兄の欲求を兄が表現する姿も見られているとのことであった。

さらに、母親から報告では、テレビを見ていて、自分が行ったことがある場所が映るのを見て「I(自分の名前)モイッタ」と過去のことを述べたという。上原(1998)の縦断的調査によれば、子どもが過去形の文体で、過去の個人的な出来事をオウム返しではなく自分の言葉で話すようになるのは、ほぼ2～3歳頃である。上原(1998)は、この時期を「エピソード報告開始時期」として、過去について述べ始めるものの、自らの関わりを自伝的に記憶するエピソード記憶とは異なり、想像上の話や実際に起こった出来事と全く関係のない話などの間違いも含んでいるものと指摘している。児のこの時の発言は正しい記憶が言語化されていたが、上原(1998)がいうように、この時期の過去への言及は未だメタ表象的(Perner, 1991)なものではないであろう。しかしながら、自身の記憶の中に蓄えられているものと「今、見ているもの」が同じか否かを判断し、自己言及できるという点で、過去をもった主体といえるのではないだろうか。

考察

本研究では、母子の自由あそび場面での観察を通して、1歳10ヶ月から2歳半に至る過程で、あそびの中でどのような共有テーマが立ち上げられているのか、そのテーマが成立する背後にある児の認識世界の特徴について各月齢ごとの特徴をみてきた。その結果、あそびの中での共有テーマは、変化していくことが示された。さらに、こうしたあそびの質的变化と連動して、児の述べる行動からみる出来事を分節化する仕方は変化していることがわかった。

共有テーマについて振り返ると、2歳前後(1歳10ヶ月と2歳0ヶ月)は模倣が主である時期だったが、その後の2歳2ヶ月、2歳3ヶ月には、母親の行動レベルの模倣にとどまらない、目標遂行的なあそびや役割交替を含む共有テーマが出現した。さらに、2歳5ヶ月には、あそびの中で相手を応援することが可能になり、あそびの遂行に関わる責任の所在について言及する姿がみられるようになった。以下では、共有テーマの変化を具体的に考察しながら、それを支えた児の認識世界に

ついて考察を行う。

共有テーマの変遷と認識世界の特徴

先に述べたように、2歳前後は、母親と同じ行為を遂行しながら、行動レベルで活動を共有することがあそびの中心的なテーマになっていた。そして、本児の場合とはくに、児の内面世界の様子が児の語る言語に現れており、この2歳前後は、発話としても「完了」や一つひとつの活動の区切りに言及することが主たる時期であった。一つひとつの動作を母親の模倣をしながら遂行し、「同じように」行動することが、この時期の特徴といえる。

それが変化してきたのが2歳2ヶ月、そして、2歳3ヶ月である。まず、自己確認的な型のあるあそびの形態が幾つかみられるようになり、母親と同じ行為を通して重なり合うことが主となるあそびは影をひそめた。また、対比的認識の発達が概念レベルでも、自他視点の分化という点でも飛躍的に発達を遂げた。とりわけ、2歳3ヶ月は、あるモノと同種の別のモノとの類似性と差異性に気づき、「コッチミエンーコッチミエル」などと言語化し、「オモシロイ」という発話が現れた時期である。類似性と差異性の認識をふくむ「同一性」の認識は、「一緒か否か」への強いこだわりを生む一因になったのではないだろうか。2歳3ヶ月に見本と一緒にすることを目標にするあそび（パズルやキューブの組み立てあそび）が現れたのは、「一緒」にこだわる児の発達要求と合致していたからであるように思われる。対比的認識の発達は、世界が「オモシロイ」ことに気づくうえでも重要な役割を果たしているといえよう。

さらに、自他視点が分化してきたこの時期は、母親に支えられながら、「見る側と見られる側」に分かれる役割交替をふくむ共有テーマが出現した。木下（2002, 2008）が、2歳後半頃から、同じ対象を見ているようでも他者が見ている対象が自分の見ている対象と異なることを理解するようになると指摘しているが、2歳3ヶ月の時点では、本人のみで「相手に見えるようにする」という他者視点を明確に理解した行動は困難であった。しかしながら、母親が「どのようにしたら他者に見えるか」を具体的に援助しており、こうした母子のやりとりの積み重ねが、視点の違いを明確に理解する一助となることが推察される。

このように、2歳代前半に、対比的認識の発達が二つのレベルで発達していき、その後の2歳5ヶ月には、久保田（1993）や木下（2008）で指摘されている重要

な変化が現れた。その一つは、あそびを共有する際に、謝罪と問責という責任の所在を明確にしようとする態度が現れたことである。さらに、2歳5ヶ月に、パズルを行うときに自らの思考内容を独り言のように言語化したり、「ホラ アンパンマン ダッタ ッショ」や「コッチダッター」、「オイテッター」のように、自分の最初の予測と実際に生じた結果とを対比させて意味づける出来事への自己関与的態度が現れたのも興味深い。これらは、まさに当の出来事に関与した自分の体験を自分の言葉で語り始めていることを示唆しているからである。こうして、本格的に児が「考える」主体となっていく姿は、2歳半の時点で「シッテル」と「シッテナイ」が対で現れたことや、「Iモイッタ」と過去について言及する姿からも伺うことができよう。

改めて、2歳半に至る自己の発達とは：本研究から得られた示唆

本研究では、特に2歳台前半に、概念的認識に関わる対比や自他視点の対比という点で、あそびの特徴が大きく変化し、児が世界が「オモシロイ」ことに気づいていく様子が示された。例えば、「コッチミエンーコッチミエル」という対比は典型的だが、これは、「同じカメラであることの中にある差異」を発見したことの喜びである。これに加えて、2歳3ヶ月時点の「述べる」行動の中で示した、「ブータ」というシマジロウのキャラクターが「ブータ」であると同時に名詞一般である「ブタ」であることに笑う姿も興味深い。おそらく未だ原初的なレベルであるとはいえ、同じ言葉の二重性（「ブタであると同時に「ブータ」でもある」）に何らかの形で気づいて笑っている姿としても捉えられるからである。おそらく、2歳台前半は、世界の二重性に様々なレベルで気付いていく時期なのではないだろうか。そして、その二重の世界に自分がどのように向き合っているのか、その自己関与的態度（視点と言い換えても可）が出来てくるのが2歳半前後であるように思われる。本研究では、自分が経験した出来事に対して自己関与的態度（「ホラ アンパンマン ダッタ ッショ」、「ゴメン、Iガタオシタ」という謝罪）を示すことができるという変化が2歳5ヶ月頃からみられるようになった。2歳半は「自分の視点で出来事に向きあう主体（自己）が形成される出発点となる年齢」といえるのではないだろうか。

共有テーマの成立を支える母親の役割

最後に、ここまで十分に触れられなかった母親の役割について補足と考察を行う。

各月齢によって児のあそびの関心の持ち方や発話の有り様が異なる中、母親はどの時点でも、児の発話をリピートしたり、児のやりたいことを推測しながら、その土台となるモノを作ったり、役割交替を行うための援助を行っていた。このような母親の姿は、おそらく、日常の子どもとのあそびの中でみられる、足場を作る母親の姿として一般的なものであると思われる。

ここで最後に母親の姿を取り上げたのは、共有テーマの成立の原型である三項関係の形成と関連づけて、母親の行動を考察するためである。

浜谷（2013）は、三項関係の形成場面を個人⇒関係モデルと関係⇒個人モデルという二つに区分している。前者は、子どもが対象に向かいあい、自分と対象との二項関係を出発点として、それが重要な他者との場面の共有につながるという、個人⇒関係の方向性での三項関係を考えるモデルである。もう一つは、重要な他者がある時点でその対象について言及することで、いったん時間がとまり、そこで時間的にも身体レベルでも「区切り」が入ることを想定する、他者の言葉が契機となる三項関係のモデルである。浜谷（2013）は、「区切り」を入れる他者の言葉が、子どもの直近の私的な経験が対象化されたものであることが重要であると指摘し、例えば「花を見て、きれいだと感じた」という経験を言語化されることが、子どもが自分の中で活動の区切りをいれ、自分の物語を作り出していくうえで重要であると述べている。

こうした視点から本研究を見直してみると、例えば、2歳2ヶ月時点でのあそび場面（大型絵本⑤）で、児が作った大型絵本の家を見て、母親が「Iが作ったお家、Iが作ったお家だね」という何気ない言葉かけの中にも、発達的な意味を見出すことができるように思われる。この時の児は、まだ、「今からお家を作るよ」と活動内容に予め言及したり、「お家が出来たよ」と、自分の活動の結果を言語化することは困難であった。家を作り終えた児に対する母親の言葉は、「自分が作ったお家、自分が作ったお家できた」という、児自身の活動の達成感とその意味づけを児の中に残すことにつながっていくのではないだろうか。さらに、2歳5ヶ月時点で児が母親と一緒に玉を転がす際に、「ダイジョウブ ガンバレー ガンバレー」と言って応援する姿は、それ以前の児に対する母親の言葉かけ（例えば、

2歳0ヶ月時点での「積み木あそび①」）が再現されているようでもある。これらは、他者から受け取った言葉を自己内で蓄え、他者に向ける自分の言葉（外言）にしていくことが2歳前後から始まることを示唆するものと思われる。

今後の課題

本研究の結果は、一児の事例に過ぎないという限界があり、本事例がすべての子どもの発達に一般化できるとは言いがたい。しかしながら、日常のあそび場面を切り口にしたとき、母子のあそびの中で立ち上がる共有テーマの特徴を、児の認識の発達と絡めて考察できたことには、一定の意味があると考えられる。そして、本研究で示された発達の過程が、先行研究（木下、2008、久保田、1993）で確認された発達の筋道と概ね一致していたことは、2歳台の発達にとって重要な転換期が2歳半前後にあることを改めて裏付けるものといえよう。以下では、今後の課題として主に二点挙げたい。

第一は、時間軸の形成に関する課題である。本研究では、1歳10ヶ月時点で「アッタ」という完了形の発話が観察され、その後、2歳0ヶ月で完了の意味づけを含む発話（「ザンネーン」や「タツ」などの未来に言及する発話、2歳2ヶ月時点で「スタートとゴール」を自分でまとめあげ、区切りをつける発話が現れた。さらに、2歳3ヶ月時点で「アト」といった、目標に向けて行為を棚上げにする意味の発話も聞かれるようになった。そして、2歳5ヶ月に「ホラ アンパンマン ダッタッショ」や「オイテッター」など、出来事に関与した自分の体験を自分の言葉で語り始める姿が観察されるようになった。久保田（1993）は、時間軸の形成に関して、1歳9ヶ月頃から「～シチャッタ」、「イチチャッタ」という形で目の前のことを現在完了で言う姿が見られるようになり、2歳前後に「雨オワッタ」など、はっきりと終了を表す言葉、「イコウイコウ」「マッテ」など、次の場面にまたがる言い方をするようになると報告している。さらに2歳半前後にはっきりと現在を現在のこととして、過去を過去とのこととして語るようになると指摘している（例：「アカリ ツイテル」や「キノウ コロンジャッタ」）。本研究でも、久保田（1993）の指摘を概ね支持する過程が示されたと思われるが、一事例のみで観察時間が短いという限界もある。子どもが出来事を分節化していく発達過程をより詳細にみていくには、指さし成立前後からの長期的縦断研究が必要である。

第二の課題は、観察時期を2歳半以降に拡張したう

えであそびと「述べる」行動の変化をみていくことである。坂上(2012)は、1歳8ヶ月から5歳3ヶ月の一児の縦断的日誌記録の分析から、1歳10ヶ月頃から3歳頃にかけて、「いつ、どこで、誰が、誰に、何をした」という情報を含む、児が過去の近時点で経験した特定の出来事に対する語りや、自己や仲間、保育者の日常の行動に関する語り、自己や仲間の好み、能力、身体的特徴(性別)に関する語りが見れると報告している。また、「対比」という形で自他を比較する語りが本格的に現れ出すのも主に2歳台であると報告されている(坂上, 2012)。確かに、2歳台に児は兄のことや弟のことを何らかの形で「述べる」ようになっている。しかしながら、本研究は、約半年間という短期間での観察であったため、自分の言葉で語り始める最初の出発点しか対象にできなかった。より長期的な視点で観察を継続し、一人の児がいかに他者や仲間、自分を含む出来事について語るようになっていくのか、という点にも今後、着目していきたい。

注

* 愛知県立大学教育福祉学部准教授

i) このような2歳半前後の特徴は、新版K式発達検査の模倣課題の達成にも表れている。田中・田中(1984)によれば、大人が作った積み木の模倣課題において、2歳前半では、モデルの積木を見てそこへ自分の積木をくっつけたり、自分の積木のところにモデルの積木を持ってきたりするが、2歳半前後では、モデルの積木と自分の積木の間に距離を置いて、モデルを見て自分のものを構成することが可能になるとしている。モデルの世界と自分の構成する世界とのあいだに連関性を持ちつつも相対的に独立したものとしてとらえ、「おなじけどちがう」、ものとして、自他の領域が分化してくるのが2歳半前後なのである。なお、模倣課題の達成は、構成する形の違いによって達成時期が異なるが、シンプルなトラック模倣課題は、2歳3ヶ月～2歳半頃を目安に可能となる。

引用文献

- 浜谷直人.(2013) 保育実践と発達支援職の関係から発達心理学の研究課題を考える：子どもの生きづらさと育てにくさに焦点を当てて、発達心理学研究, 24, 484-494.
- 神田英雄.(2004) 伝わる心がめばえるころ—二歳児の世界. 株式会社かがわ出版.
- 木下孝司.(2002) ミスコミュニケーション状況における2歳児の他者視点に関する理解, 神戸大学発達科学部研究紀要, 10, 25~34.
- 木下孝司.(2008) 乳幼児期における自己と「心の理解」の発達 ナカニシヤ出版.
- 久保田正人.(1993) 2歳半という年齢. 新曜社.
- 三木成夫.(1982) 内臓のはたらきと子どものこころ. 築地書館.
- 岡本夏木.(1982) 子どもとことば. 岩波新書.
- Perner.(1991) Understanding the representational mind. The MIT Press.
- 坂上裕子.(2012) 幼児は自己や他者に関する理解をどのように構築するのか：一児の1歳8ヶ月から5歳3ヶ月までの発話記録の分析から, 乳幼児教育学研究, 21, 29-45.
- 瀬野由衣.(2010) 2~3歳児は仲間同士の遊びでいかに共有テーマを生み出すか：相互模倣とその変化に着目した縦断的観察-, 保育学研究, 48, 51-62.
- 瀬野由衣.(2012) 2歳児の発達研究の展望, 愛知県立大学教育福祉学部論集, 61, 79-90.
- 田中昌人・田中杉恵.(1984) 子どもの発達と診断3 幼児期 I. 大月書店.
- 谷村 覚.(1989) 自己と他者の発生—ワロンから何を学ぶか. 梶田毅一(編) 自己意識の発達心理学 (pp. 127-178) 金子書房.
- 谷村 覚.(1994) 自我の対話構造：ワロンの自我発達論. 梶田毅一(編) 自己意識心理学への招待：人とその理論 (pp. 147-170) . 金子書房.
- 寺川志奈子.(2009) 2~3歳の発達の姿. 白石正久・白石恵理子(編) 教育と保育のための発達診断 (pp. 98-118) . 全障研出版部.
- 上原 泉.(1998) 再認が可能になる時期とエピソード報告開始時期の関係：縦断的調査による事例報告, 教育心理学研究, 46, 271-279.
- ワロン, H. (1965) (Wallon, H. /久保田正人訳) 児童における性格の起源 明治図書 (Les origines du caractère chez l' enfant. Paris: Presse Universitaires de France, 1949)
- ワロン, H. (1983) (Wallon, H. /浜田寿美男訳編) 身体・自我・社会. ミネルヴァ書房.

付記

本研究は、JSDP科研費24730541の助成を受けたものです。